

## 「質的統合法 (KJ法)」を用いた「基礎ゼミナール」履修学生の学びの評価

上山 和子<sup>1)</sup>\*・丸山 純子<sup>1)</sup>・原田 信之<sup>1)</sup>・山内 圭<sup>1)</sup>  
佐々木 順造<sup>1)</sup>・矢嶋 裕樹<sup>1)</sup>・杉本 幸枝<sup>1)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部

(2017年12月20日受理)

本研究では、「質的統合法 (KJ法)」を用いた「基礎ゼミナール」の学生の学びを分析し、次年度以降の学修支援に活かすことを目的とする。方法は質的記述的研究である。その結果、7つのシンボルマークを抽出した。つまり、学生は、「基礎ゼミナール」をとおして【初年次教育としての学修方法の学び】として他者の意見を受け入れた上で自己の考えを発言する力を認識していることが明らかになった。

(キーワード) 看護学科、FD、質的統合法 (KJ法)、評価

### 1. はじめに

看護基礎教育課程の基礎分野である「基礎ゼミナール」は、教養科目の担当の教員を中心に、看護学科の教員が全員関わる科目である。今回は、2015年度看護学部のファカルティ・ディベロップメント(以下、FDとする)として「質的統合法 (KJ法)」研究会顧問山浦晴男氏を指導講師に迎えて2日間の研修を行い、「基礎ゼミナール」の学生の学びを分析する機会を得た<sup>1) 2)</sup>。

今回の分析をとおして、「基礎ゼミナール」の意義と教育効果を明確にすることができ、より内容を深めたゼミナールへの示唆が得られると考える。その結果を踏まえて、教養科目担当と専門科目担当の教員が相互に学べる機会にしていきたい。

質的研究方法の一つであるKJ法は、文化人類学者の川喜多二郎が開発した分析方法で、1950年代に「バラバラな断片情報が、すべて辻褃が合う形で説明できるようにすること」を出発点とし、カードに一つのまとまりの内容を記入し、カード同士のまとまりに注目し、説明を行っていく方法を考案し体系化した<sup>3)</sup>。また、山浦は、KJ法の基本原理と技術をもとに「質的統合法 (KJ法)」としてフィールド研究に用い、実践的に活用できるように発展させた<sup>4)</sup>。看護学においても実態把握に基づく問題解決方法として活用されるようになった。

本研究では、「質的統合法 (KJ法)」を用いて「基礎ゼミナール」履修学生の学びの評価を行い、教育効果を明らかにする。

### 2. 研究方法

#### 1) 研究対象

2014年度「基礎ゼミナール」の最終まとめで実施したアンケートのうち、研究への参加を了承した学生から提出され、基礎ゼミナールで学んだ内容について自由記述で求めたデータを、研修用に加工して準備した、51枚のラベルを分析対象とした。

#### 2) 研究方法

自由記述で求めた「基礎ゼミナール」で学んだアンケート内容を「質的統合法 (KJ法)」に基づき分析し、考察する。

(1) アンケートの記述に対して1文1意味となる元ラベルを作成した。

(2) 元ラベルの記述の意味・内容の類似内容をグループ化し、集まったグループごとに全体間を表現する新たなラベル(表札)を作成した。集約されたラベルを最終ラベルとし、「シンボルマーク」をつけた。

(3) シンボルマーク同士の関係性を構造化するために見取り図を作成した。

(4) 見取り図を簡単に説明する結論文を作成した。

#### 3) 倫理的配慮

2014年度に新見公立大学で「基礎ゼミナール」を履修した修了者に本研究に関する説明書を配布した。説明文書には、研究目的、質的分析によるデータ処理、匿名性が完全に確保されていること、成績に関与しないこと、参加は自由意思で拒否による不利益は全くないこと、基礎ゼミナールの成績は確定していること、同意が得られない場合は、データから外すことを記載した。

基礎ゼミナールの最終まとめで実施したアンケートの使用については、新見公立大学倫理委員会の承認を受けて実

\*連絡先: 上山和子 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

施した（承認番号：84）。

第9～14回：専門系討論

第15回：まとめ

### 3. 基礎ゼミナールの概要<sup>5)</sup>

1) 授業目的：主体的かつ能動的に問題解決に挑戦する学修習慣を身につけることを目的とし、チュートリアル形式による学習方法を利用する。本ゼミナールを通じて、学生相互および学生と教員との交流を深め、コミュニケーション能力の向上を図る。

2) 授業概要：大学生として主体的な学修方法を学ぶ。図書館の使い方、テキストの選び方、本の読み方、レポートの書き方、医学中央雑誌や論文検索サイトなどを利用した文献検索方法、教職員からの指導の受け方、学生同士のグループ討議方法、発表方法などとおして、論理的なものの考え方や伝え方を学修する。1年前期に、看護学科教員全員による少人数グループでのゼミ形式で、教員や学生同士の交流を深めながら、大学生としての自覚と学修意欲を高める。

3) 授業計画：

第1～4回：オリエンテーション（チュートリアル形式による学習方法の説明、情報機器の使い方、レポートの作成、討論の方法）

第5～8回：基礎・教養系討論

### 4. 結果

最終まとめのアンケート内容のうち、元ラベル51枚を分析対象とした。グループ編成を3段階繰り返して、最終ラベルを抽出した。

それらのシンボルマークは、【初年次教育としての学修方法の学び】【討論をとおした意見交換による視点の広がり】【グループワークによる知識の広がり】【役割分担による運営】【グループワークによる討論方法の理解】【グループ仲の深まり】【グループワークの楽しみ】であった。各シンボルマークと最終ラベルがどのように編成されたのか元ラベル《 》を用いて示した。シンボルマークの関係性を示す見取り図を作成し、ストーリーをシンボルマーク7枚を使用して表現した（図1）。

1) シンボルマークの説明

(1) 【初年次教育としての学修方法の学び：他者の意見を受け入れた上で自己の考えを発言する力】

学生は、「基礎ゼミは大学生らしい授業で討論やレポート・報告など将来に役立つ」と認識しており、いままでの

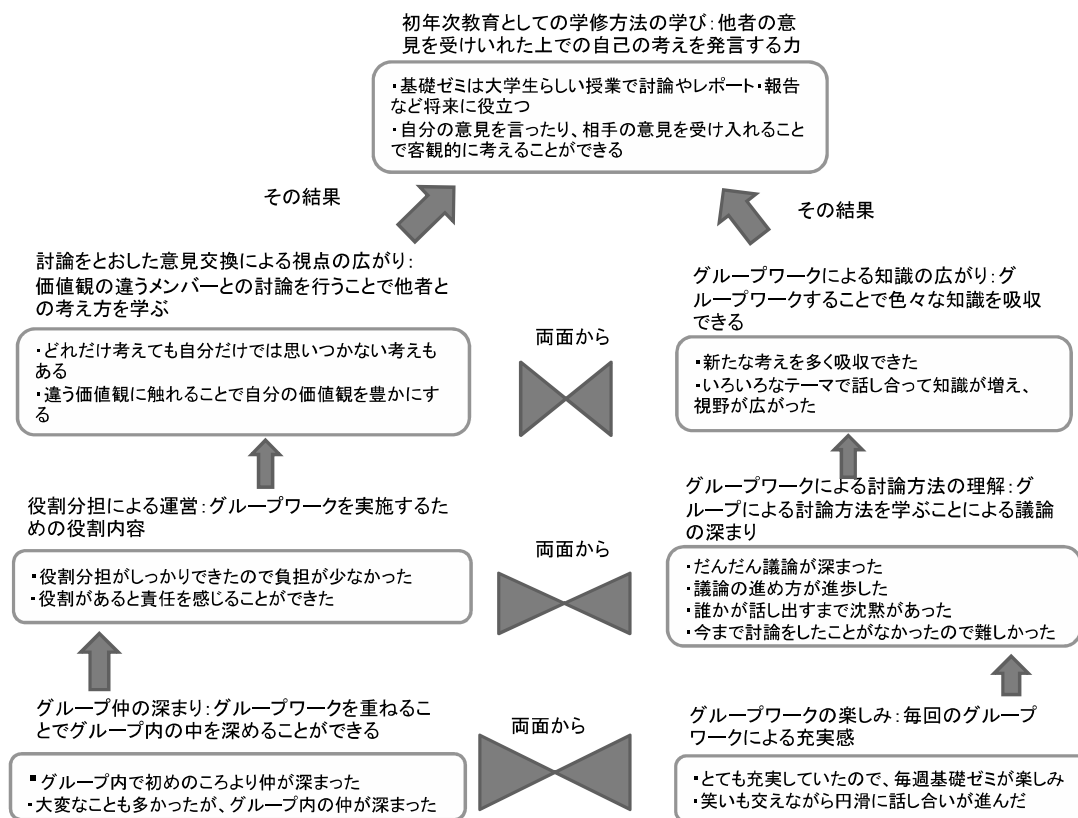


図1 基礎ゼミナールを履修した学生の学修評価の見取り図

高校時代の授業とは違う形式を体験していた。この体験をとおし、《自分の意見を言ったり、相手の意見を受け入れることで客観的に考えることができる》など積極的に自己の考えを述べていた。

(2) 【討論をとおした意見交換による視点の広がり：価値観の違うメンバーとの討論を行うことで他者との考え方を学ぶ】

学生は、《違う価値観に触れることで自分の価値観を豊かにする》ことに気づき、《どれだけ考えても自分だけでは思いつかない考えもある》など他者との価値観の違いをとおして視点を広げていた。

(3) 【グループワークによる知識の広がり：グループワークをすることで色々な知識を吸収できる】

学生は、《色々なテーマで話し合っただけで知識が増え、視野が広がった》など知識を広げる機会となり、《新たな考えを多く吸収できた》と知識の深まりを実感していた。

(4) 【役割分担による運営：グループワークを実施するための役割内容】

学生は、《役割があると責任を感じる》などの役割をとおしてグループワークの運営の仕方を学び、《役割分担がしっかりできたので負担が少なかった》として、それぞれの役割の内容を学んでいた。

(5) 【グループワークによる討論方法の理解：グループによる討論方法を学ぶことによる議論の深まり】

学生は、最初は《今まで討論をしたことがなかったので難しかった》と感じていたが、《議論の進め方が進歩した》というように討論方法を理解することで、学びが深まっていた。

(6) 【グループ内の深まり：グループワークを重ねることでグループ内の仲を深めることができる】

学生は、《グループ内で初めのころより仲が深まった》と捉えており、共同作業をおこなうことで《大変なことも多かったが、グループ内の仲が深まった》と感じており、同じ体験をとおして関係形成を深めていた。

(7) 【グループワークの楽しさ：毎回のグループワークによる充実感】

学生は、最初は緊張がありながらも《笑いも交えながら円滑に話し合いが進んだ》などグループワークの中で笑いを交えながら進めることで、《とても充実していたので、毎週基礎ゼミが楽しみ》というように基礎ゼミを楽しみながら進めていた。

## 2) 基礎ゼミナールの学生の学びの見取り図の説明

学生は、4年間の看護基礎教育課程の最初の履修科目として、1年次前期の「基礎ゼミナール」を履修し、グループによる学修として【グループ内の深まり】をスタートとして【グループワークの楽しさ】を見つけ、【役割分担による運営】により、具体的に展開する方法を学んでいた。最

初は討論方法を理解するのが難しいと感じていたが、【グループワークによる討論方法の理解】で発展させることができていた。

具体的に討論方法を理解することをとおして、【討論をとおした意見交換による視点の広がり】を感じるとともにグループメンバー同士で討論テーマを追究することで【グループワークによる知識の広がり】を体験し、知識を広げていた。

これらのグループワークの学修体験は、高校と大学との授業形態の違いを学び【初年次教育としての学修方法の学び】として捉えていた (図1)。

## 5. 考察

2015年度の看護学部のFDとして「質的統合法 (KJ法)」の指導講師を迎えて2日間の研修を行い、使用したデータは、「基礎ゼミナール」の最終まとめの自由記述で求めた学生の学びである。

その結果、学生は高校時代とは違う授業形態を体験することで、7つのシンボルマークが示すように講義形式ではなく演習による授業内容を認識し、自らの発言をとおした双方向により学び合い、初年次教育に必要な学修方法を身につけたと考える。

現在、学士教育として初年時教育の重要性が問われている。看護基礎教育課程では、基礎分野から専門基礎分野、専門分野を学修する基盤として、学士課程における学修方法を身につける科目として情報検索、双方向の討論、レポートの書き方などを学ぶ「基礎ゼミナール」を配置している。

情報検索は、基礎的知識、看護専門職に必要な知識、卒業研究に必要な知識。知識は、認知領域とも言われ、記憶や理解に関する能力であり、深める過程において情報を検索して学修に必要な知識を習得するために必ず身につける必要があり、1年次前期に30時間かけて修得する。

討論方法を学修することは、知識を踏まえた意見交換の場となる。看護学の科目では、専門基礎分野で医学系の科目を学修する。その基盤として、看護学概論やライフサイクルに沿った各科目の概論では、健康の定義や看護に対する考え方を学修する。そのため、グループワークを用いた学修方法を多く取り入れ、多様な考え方を学び、知識を深めることは重要となる。

また、学修過程におけるレポートの書き方は、看護学の統合科目として配置している卒業研究の基盤となる。今回のデータでは、資料作成について触れているデータは少なかったが、討論に必要な資料として用いるレポート作成をとおして、書き方やまとめ方を学ぶ機会になったと考える。

学修を通して習得できる能力は、知識、技能、態度の3つの領域に分かれる<sup>6)</sup>。学生の教育効果の分析において、学

修への動機づけが重要であり、グループワークは人間関係形成の機会となる。本研究の結果にもみられたように最初は難しく課題であった学修方法を習得することで学生は授業を楽しみ、今後の学修活動への動機づけを高めることができたと考える。つまり、教授方法として学生の満足感が高まるように授業形態の工夫が必要と考える。

今後も1年次の学修意欲を継続できるよう、内発的な動機づけを高めるような授業方法を追究していきたい。

## 謝辞

FDの指導講師ならびに調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1) ナンシーバーンズ・スーザン・K・グローブ著、黒田裕子・中木高夫・逸見功監訳：バーンズ&グローブ看護研究入門第7版.エンゼビア・ジャパン, 2-66, 2015.
- 2) 上山和子・古城幸子：2015年度看護学部FD「質的統合法（KJ法）研修会」報告. 新見公立大学紀要, 37, 127-129, 2015.
- 3) 川喜田二郎：発想法－創造性開発のために－. 中央公論社, 65-114, 1995.
- 4) 山浦晴男：質的統合入門法考え方と手順. 医学書院, 1-78, 2012.
- 5) 新見公立大学：新見公立大学2014年度版シラバス. 1, 2014.
- 6) 中井俊樹・小林忠資：看護のための教育学. 医学書院, 21-28, 2015.

## **An Evaluation of Learning through Basic Seminar with Qualitative Synthesis Method (KJ Method)**

Kazuko UHEYAMA, Junko MARUYAMA, Nobuyuki HARADA, Kiyoshi YAMAUCHI, Junzo SASAKI, Yuki YAJIMA,  
Yukie SUGIMOTO

Department of Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

### Summary

The aims of this study are to analyze the learning of the students with qualitative synthesis method (KJ Method), and to make use of the analysis results to support the learning of the students. The method we used is qualitative descriptive method, and seven symbol marks were extracted. As seen in the symbol mark of “Learning the way to learn in the first year of university life,” we have found out that the students learned the importance of the ability to express their own opinion after accepting other students’ opinions.

Keywords: the Department of Nursing, FD (Faculty Development), qualitative synthesis method (KJ Method), evaluation

